

【調査報告】

沖縄における戦争・平和関連施設の調査

芝 涼香

A Report of Museums on War and Peace in Okinawa

SHIBA, Suzuka

本稿は 2014 年 9 月 6 日（土）から 9 日（火）にかけて行った、沖縄の戦争・平和関連施設の調査報告である。

1. 沖縄調査の概要・日程

本調査では以下の日程で調査を行った。

● 第一日目 9 月 6 日（土）

正午：到着

午後：南風原文化センター前館長の大城和喜さんの案内で南風原文化センター、ひめゆり資料館を見学

● 第二日目 9 月 7 日（日）

午前：平和祈念資料館を見学

午後：南風原文化センター展示室、図書室見学、沖縄陸軍病院南風原壕群 20 号壕見学

● 第三日目 9 月 8 日（月）

午前：対馬丸記念館、佐喜真美術館

午後：南風原文化センター図書室調査、平和学習の子ども達にインタビューを実施

● 第四日目 9 月 9 日（火）

午前：糸満市真栄里の綱引き見学

午後：糸数城、斎場御嶽見学

夜：離沖

2. 南風原文化センター …展示以外の Museum の可能性

● 概要

- ・所在地：〒901-1195 沖縄県島尻郡南風原町字兼城 686 番地
- ・連絡先： tel:098-889-4415 fax:098-889-7657
- ・開館時間：午前 9 時～午後 6 時／休館日：毎週水曜日、12 月 29 日～1 月 3 日

・南風原文化センター入館料<sup>1</sup>

| 区分  | 町内 | 町外    | 町外団体（20人以上） |
|-----|----|-------|-------------|
| 小学生 | 無料 | 150 円 | 100 円       |
| 中高生 | 無料 | 200 円 | 150 円       |
| 一般  | 無料 | 300 円 | 250 円       |

・文化センター運営の基本

1. みんなで創り、みんなを結ぶ
2. 学校や地域・他機関の要求や課題に応える
3. 足元を深く掘り起こし、世界に広がる

・文化センター活動の柱

1. 資料の収集・記録保存・調査研究
2. 資料・情報の公開と提供
3. 歴史・文化の継承と創造
4. 人と文化の交流<sup>2</sup>

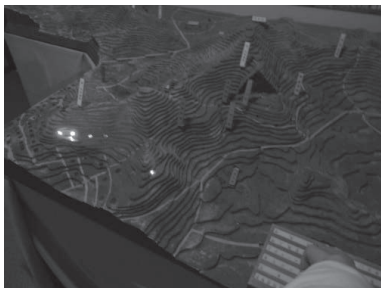


写真：ジオラマ入り口

・開設：1989 年 11 月 3 日<sup>3</sup>

博物館法の中では博物館相当施設に当たる。<sup>4</sup>

・展示室



写真：ボタンを押すと光る模型

展示室は以下の 4 つのテーマで構成されている。

「南風原の沖縄戦」、「戦後ゼロからの再建」、「移民」、「人々の暮らし」。ここでは博物館でよくある時系列順の展示ではなく、南風原で起こった出来事を中心に展示している。<sup>5</sup>したがって沖縄戦が大きなテーマとなっている。

受付を終えるとすぐ隣が入り口となっている。「南風原の沖縄戦」の看板以外に冒頭にキャプションなどはなく、沖縄陸軍病院南風原壕の再現ジオラマから展示が始まる。入ってすぐにひめゆり学徒隊が「飯上げ」から帰ってきた様子が人形によって再現される。

中は縦長の空間が続いており、照明はあるものの暗い。<sup>6</sup>右手に病床、左手に壁（所々に兵器や医療品等の展示ケース有）といった壕の空間が再現されている。十字路では手術の様子 of 再現があり、再現ジオラマは青酸カリを飲まされた人の証言パネルで終了する。

ジオラマを出ると陸軍病院や飯上げの道などを説明する模型がある。各施設のボタンを押すと、模型内での所在地がランプで光る仕組みとなっている。模型の先の草をくぐると、奉安殿や慰問袋等々の資料とパネル解説へ進む。どのパネルでも南風原の人々から見た戦争を取り扱っている。

南風原の戦没者名のパネル下には壕から発掘された様々な遺物が展示され、人々の名前が単なる文字ではなく、生活をしていた人物として浮き上がる仕組みとなっている。

アメリカ軍の収容所テントを再現したネットをくぐると「戦後ゼロからの再建」展示が始まる。ここでは主に解説パネルでの説明となっている。<sup>7</sup>

・展示室以外の施設内容…職員室、ガイドの会、応接室、研修交流室、図書室、企画ホール (最大 150 人収容)、収蔵庫、映写室 (最大 50 人収容)、織物収蔵室 (ギャラリーさゆん) 等々

南風原文化センターでは「常設展示のほか企画展や講演会、音楽会、交流会など」も行っている。実際に訪問時にもブラジルの独立記念日を祝うイベントが催されていた。

映写室では「南風原の沖縄戦 沖縄陸軍病院」「南風原・沖縄の戦後史」という 2 つの DVD 映像を見せていただいた。「南風原の沖縄戦 沖縄陸軍病院」では映像と証言を交えながら、陸軍病院壕の移転背景から一般公開に至るまでの経緯が分かりやすく説明されている。背景と流れについて映像を通してみることで、壕の見学前に見るのに適している。映写室には沖縄戦以外にも広島やアイヌ等の DVD、VHS 資料がある。

図書室も充実しており、南風原関連資料や沖縄戦、沖縄の文化等幅広く収集している。

#### ● 特色 … 展示以外の Museum の可能性

南風原文化センターは展示以外の活動に特色がある。アーティストや文化交流も盛んに行っているが、中でも目を引くのが南風原町子ども平和学習交流事業だ。この事業は 1994 年より始まった。南風原町の小学 6 年生が戦争や平和、人権について学ぶ。今年は学童疎開から 70 年、子どもたちは学童疎開を追体験し、体験者とも交流をした。<sup>8</sup>このように戦争や平和について次世代が考える機会を設けている Museum<sup>9</sup>には、展示空間以外の可能性が大いにあることを感じた。

### 3. ひめゆり平和祈念資料館 …体験者の語りと記憶

#### ● 概要

- ・所在地：〒901-0344 沖縄県糸満市宇伊原 671-1
- ・連絡先：tel 098-997-2100/fax 098-997-2102
- ・開館時間：午前 9 時～午後 5 時 30 分／年中無休
- ・入館料：大人 310 円、高校生 210 円、小・中学生 110 円／団体は別料金

ひめゆり平和祈念資料館は、1989 年 6 月 23 日、財団法人沖縄県女師・一高女ひめゆり同窓会により設立された。<sup>10</sup>

今年で開館から 25 周年を迎え、夏には入館者が 2000 万人に達する見込みである。年間で 2300 余りの学校団体の訪問がある。また 2014 年 3 月 19 日付で登録博物館となり、都道府県教育委員会より博物館として登録された。

2013年度統計によるデータを以下に示す。

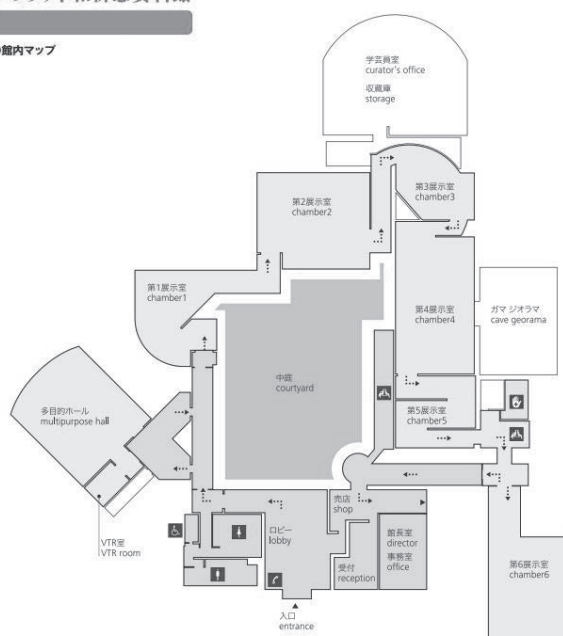
・総入館者状況：2013年度入館者数は660,374人。内外国人は5,296人。

・月別入館者状況：2013年度で入館者が多かった時期は修学旅行シーズンの10月～12月の3か月間であった。3か月間の合計は総入館者数の38パーセントを占める。一方で慰霊の日がある6月は全体の6パーセントとなっており、少ない。

・類別入館者数：入館者の割合は大人47パーセント、高校生38パーセント、小・中学生15パーセントとなっている。団体の割合では、特に高校生の割合が68パーセントと高く、次いで小・中学生20パーセント、大人12パーセントとなっている。11

ひめゆり平和祈念資料館

●館内マップ



図：ひめゆり平和祈念資料館館内マップ

(ひめゆり平和祈念資料館 HP より：

[http://www.himeyuri.or.jp/JP/etc/plan\\_map\\_jp.pdf](http://www.himeyuri.or.jp/JP/etc/plan_map_jp.pdf))

### ● 展示空間について

館の見学を通して、この館の特色が「語る主体がひめゆり学徒」であること、展示空間の工夫を感じることができた。第一展示室では沖縄戦に入る以前の女学生たちの生活について展示されている。寮内での美人投票では「選ばれた者はお菓子を奢らなければならないという愉快なイタズラ」があったという説明や、『『あの本読んだ?』などと本が話題になりました』等、語り手の口からそのまま出てきたような表現がキャプションに記されている。こうした女学生の語りから、彼女たちへの親近感が生まれやすくなっている。

また、展示空間は小さな庭を囲む回廊式になっていることが印象的だった。受付、ロビーから外へ出て、やや坂になっている廊下を抜けると展示が始まる。第一展示室のテーマは「ひめゆりの青春」。女学生の平和な生活と戦争の全体説明がパネルと実物で紹介される。第二室のテーマは「ひめゆりの戦場」。病院壕のジオラマや証言によって説明している。第三展示室は「解散命令と死の彷徨」。展示室は半円形状で、巨大スクリーンに生存者の証言映像が映し出される。第四展示室のテーマは「鎮魂」。第三展示室で見た生々しい映像から、一気に静かな空間へと切り替わる。壁面には200名あまりの犠牲者の遺影が並べられ、室内中央には一人ひとりの証言が置かれている。隣にはガマのジオラマがあり、暗い展示室内に立ちならぶ証言台（本型の台）は一人ひとりを悼む碑のようだ。資料館前には実際に使われたガマがあり、ジオラマは学徒隊が見上げていたであろう、ガマの下から上を見上げた空間が再現されている。第五展示室出ると明るい光に溢れている。テーマは「回想」。

ここには戦争を繰り返さないという強い想いがこもった詩がパネルとして掲載されている。順路としてはその後「平和への広場」というテーマの第六展示室へつながるが、ここは 2004 年に増設された空間で、基本的には第一から第五展示室が一連の流れとなっている。第六展示室は訪問時には資料館の成り立ちや証言の収集についての展示が行われていた。

## ● 記憶の継承

証言者の高齢化が進み、開館当初に比べ、証言員の数は約 3 分の 1 の 9 名となった。これにより、「元ひめゆり学徒による講話」予約の受付は終了することとなった。2014 年 10 月受付からは資料館の説明員や学芸員たちによる「次世代による平和講話」として予約を受け付けている。<sup>12</sup>

証言者が活動を行えなくなったときにどう対応するかという課題は開館から 10 年が過ぎた 2000 年頃から浮上してきた。当初は館内で証言員の証言映像を上映することが決まったが、それだけでは不十分という意見が出て、2004 年に「展示の全面リニューアル」を行った。この他、「生存者の証言の映像記録の制作」と「語り継ぐ後継者育成事業」の 3 つをあわせて「次世代プロジェクト」の取り組みが 2001 年から始まった。この取り組みでは生存者と職員、協力者が国内外の平和使節を訪問し、戦跡めぐりや戦前戦後体験の聞き取りなどを行っている。<sup>13</sup>

館の設立主体が生存者であっただけに、今後ひめゆりの記憶をどのように伝えていくのかはかなり重要な問題だ。今後、注目していきたい。

## 4. 沖縄県平和祈念資料館 …祈りの空間と学び

### ● 概要

- ・所在地： 沖縄県糸満市字摩文仁 614 番地の 1 (県営平和祈念公園内に所在)
- ・連絡先： TEL 098-997-3844 FAX 098-997-3947
- ・開館時間： 午前 9 時から午後 5 時まで。ただし、常設展示室への入室は午後 4 時 30 分まで。(年末年始休館日 12 月 29 日～1 月 3 日・臨時休館日 特別の事情により知事が休館を必要と認めた日)

### ・【常設展示室観覧料】

| 区 分 | 個 人   | 団体 (20 人以上)  |
|-----|-------|--------------|
| 大 人 | 300 円 | 1 人につき 240 円 |
| 小 人 | 150 円 | 1 人につき 100 円 |

14

沖縄県平和祈念資料館は県営平和祈念公園内にある施設である。公園内には資料館のほか、国立沖縄戦没者墓苑及び霊域、沖縄平和祈念堂、平和の礎がある。なお、資料館の管理団体は沖縄県、記念公園と平和の礎の管理団体は沖縄県、指定管理者は財団法人沖縄県平和祈念財団である。祈念堂の管理団体のみ財団法人沖縄教会である。<sup>15</sup>

## ● 開館と設立理念

沖縄県平和祈念資料館は1975年に開館した。設立理念では沖縄戦と戦後アメリカ軍事支配に抗してきた“沖縄のこころ”を訴えている。“沖縄のこころ”とは「人間の尊厳を何よりも重くみて、戦争につながる一切の行為を否定し、平和を求め、人間性の発露である文化をこよなく愛する心」<sup>16</sup>である。

## ● 展示

展示室は大きく1階の「子ども・プロセス展示室」と2回の「常設展示室」の2つに分かれる。常設展示は横長の空間内に「沖縄戦への道」、「鉄の暴風」、「地獄の戦場」、「証言」、「太平洋の要石」といった順に構成されている。展示手法は現物と解説パネルが主である。「鉄の暴風」、「地獄の戦場」ではジオラマによる展示となっている。「鉄の暴風」の空間ではアメリカ軍上陸の映像に合わせて、地図上の上陸地点が赤く点滅する仕組みとなっており、照明が変わることで劇場空間のようになっている。ガマのジオラマでは子どもの泣き声がもれないように口を押える母親や悲しく頭を抱える老人など表情によって訴えかける人形再現がある。「証言」の空間では、ひめゆりと同じように証言が本型の台に乗せられて並んでいる。他に証言映像ブースで映像を見ることもできる。「太平洋の要石」の空間では戦後の沖縄の歩みを展示パネルによって詳細に記述している。

今回の調査では詳細な展示解説が印象に残った。常設展の一室を見て回るだけでかなりの時間を要する（全ての解説をじっくり読んでいると30分程は必要）。展示に全てを盛り込んだ印象だが、これは来館者にとっては良し悪しがあるだろう。平和学習の場として多くの学校が利用する施設ではあるが、学校連携などどのように行っているのだろうか。学校向けに『資料館学習の手引き』や『平和祈念資料館 ワークブック』なども販売されているが、どのように、どれだけ活用されているのか気になるところだ。

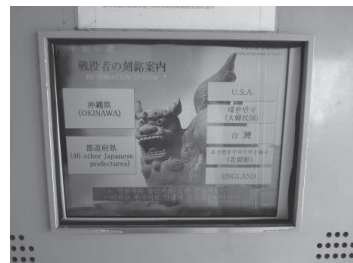
『資料館学習の手引き』には糸満市立糸満小学校教諭による実践事例が記載されている。この指導計画によると全52時間の授業を行っている。内訳は総合の時間が35時間、社会の時間が4時間、図工の時間が3時間、「学行」の時間<sup>17</sup>が2時間、道徳の時間が3時間、学校行事の時間が5時間である。この中で資料館の見学は学校行事の5時間に当たる。この時間中に、常設展示の見学、資料館「平良先生」の話聞く、「子ども・プロセス展示室」の見学、平和の礎の見学を行う。<sup>18</sup>

こうした52時間もの時間を必要とする授業案は沖縄県の中でも近隣の学校でしかできないと思われるが、県外の学校での取り組みや、それに対する資料館側の活動についてより詳しく調べる必要がある。

## ● 平和の礎

公園内にある平和の礎では国籍を問わず、沖縄戦で亡くなったすべての人を刻銘対象としている。沖縄県出身者と他都道府県及び外国出身の戦没者の碑が礎を中心として円形に広がっている。

平和の礎の基本理念は「戦没者の追悼と平和祈念」、「戦争体験の教訓の継承」、「安らぎと学びの場」であ



写真：「戦没者の刻銘案内」画面

る。<sup>19</sup>人名が記された記念碑は祈りの場という空間を生み出している。

公園内の所々で、「戦没者の刻銘案内」が設置されている。記念碑は数多くあるため、来園者がすぐに目的地に行ける案内がなされている。国別、都道府県別、50音順で検索する。マップもともに記した情報は印刷することもできる。

## 5. 対馬丸記念館 …記憶の空間装置

### ● 概要

- ・所在地：那覇市若狭 1-25-37
- ・連絡先：TEL 098-941-3515 / FAX 098-863-3683
- ・開館時間：午前 9:00～午後 5:00 / 休館日：毎週木曜日・年末年始
- ・入館料金<sup>20</sup>

|       | 個 人   | 団 体   |
|-------|-------|-------|
| 大 人   | 500 円 | 450 円 |
| 中・高校生 | 300 円 | 270 円 |
| 小学生   | 100 円 | 90 円  |

対馬丸記念館は 2004 年に開設された比較的新しい館である。建設理念では「財団法人対馬丸記念会では事件から半世紀以上たった今こそ、この歴史の記憶を共有し平和といのちの大切さを子どもたちの目線で伝えていくことが必要と考え、対馬丸記念館の建設に取り組んできました。対馬丸記念館は平和学習の場としてだけではなく、子どもたちを取り巻く様々な環境において地域コミュニティの重要性やいのちの大切さを知る場でありたい。さらには多角的視点に立った児童福祉や平和教育のあり方を学び、その拠点となる記念館を建設・運営することを目標としています。」<sup>21</sup>（下線部芝）とある。

### ● 展示空間

この館の最大の特徴は建物自体が記憶の装置であることだ。建物自体が対馬丸と同じ規模で造られており、来館者は館内に入る前から出るまでの間に、対馬丸に乗船した子どもたちの追体験ができるようになっている。

対馬丸記念館の青い看板の先に 2 階の受付に向かう階段を上がる。これは対馬丸に乗船した子どもたちと同じルートを辿っている。2 階の受付が終わると館の職員による説明とビデオ映像が始まる。説明と映像では対馬丸事件に至るまでが解説される。天井部分からは証言者によって再現された筏と人形がすりさげられている。2 階の展示を見終えると、1 階へと向かう。この順路も子どもたちが乗船後、対馬丸の中で行動した順路と同じになっている。1 階では証言者の視聴コーナーや学童疎開についての展示、平和へ向けた活動紹介が配置されている。

建物の空間づくりにおいて、追体験ができる非常に珍しい構造になっているのは勿論、対馬丸事件にトピックを絞ることで、子どもたちの記憶を強く伝えている館だと感じた。

## 6. 佐喜眞美術館 …記憶とアート

### ● 概要

- ・所在地：〒901-2204 沖縄県宜野湾市上原 358
- ・連絡先：TEL 098-893-5737 FAX 098-893-6948
- ・開館時間：9:30～17:00 火曜休館
- ・入館料 大人 700 (630) 円 中高 600 (540) 円 小人 300 (200) 円

※（ ）内は 20 名以上の団体料金 <sup>22</sup>

佐喜眞美術館は、1994 年 11 月 23 日に開館した私立美術館である。設立者であり館長でもある佐喜眞道夫氏は 1946 年、疎開先の熊本県で生まれた。彼は東京で過ごした大学時代に、自らのアイデンティティーに問題意識を持ち、鍼灸院を開業しながら、戦争や平和に関する絵のコレクションを始める。1984 年 4 月に「沖縄戦の図」を描いた丸木位里・丸木俊夫夫妻と出会い、館の設立に向けて動き始める。現在は修学旅行生への説明などの活動も行っている。<sup>23</sup>

### ● 展示空間

佐喜眞館長は「アートで心を整える『もの想う空間』」として、美術館の空間構成にかなりの工夫を凝らしている。展示室は一直線に並んで 3 つあり、第一展示室は 8 メートル角、高さ 3.5 メートル、第二展示室は 10 メートル角、高さ 4.5 メートル、第三展示室は 12 メートル角、高さ 5.5 メートルと徐々に大きくなっていく構造だ。これは沖縄戦時、人々が逃げ込んだガマと同じ空間を意識して作られた。修学旅行で来る子どもたちはガマを見学し、そこでの話に衝撃を受ける。ガマは入り口が狭く、中は広い構造になっているため、生徒たちは美術館の中を進むことで無意識のうちにガマ体験を思い出す。そして壁を見ると『沖縄戦の図』が目の前にあり、ガマで受けた感覚と美術鑑賞が重なるような装置となっている。<sup>24</sup>

この構成は開館以前から丸木夫妻の『沖縄戦の図』を収集していたから、構想できたものだ。一方で、この作品以下外にも佐喜眞館長のコレクションである、ケーテ・コルヴィッツ、上野誠などが展示される。訪問時には特別展「越境する版表現—東アジアの作家たちと版 17 展」が第一、第二展示室において開催されていた。現代アートにおいても戦争・平和を考える展示となっている。第三展示室では入って正面に巨大な『沖縄戦の図』、左手に『喜屋武岬』、『亀甲墓』、『久米島の虐殺（1）』、『久米島の虐殺（2）』、右手に『残波大獅子』、『ガマ』、『喜屋武岬ガマ』などの作品が並ぶ。どれも凄惨な内容だが、丸木夫妻は人間そのものや人間の尊厳を描くことについて、どうやら特別な想いがあるように感じた。

作品論について述べればきりがないが、丸木夫妻はそれぞれ、日本画と洋画の折衷という新しい試みを目指していた画家であった。最近では神奈川県立近代美術館において、「戦争/美術 1940-1950 モダニズムの連鎖と変容」展（2013 年 7 月 6 日～10 月 14 日）が行われ、丸木夫妻も言及されている。<sup>25</sup>このように美術史の観点からも二人は注目される存在である。

工夫がされているのは展示空間だけではない。普天間基地に食い込むように建てられたこの美術館は存在自体が主張を持つ特異な美術館でもある。館外の装置や階段にもそれぞれ、館長も想いが込められている。アートと戦争・平和というトピックについて取り上げている点でかなり興味深い。作品と空間について考えさせられる館である。

## 7. 調査とインタビューを終えて

この沖縄調査においては、各館の訪問を通して多くのことを吸収することができた。南風原文化センターでは Museum に展示空間以外の大きな可能性を感じることができた。これは人的リソースによって大きく左右される部分であり、どの館でも可能というわけではないが、記憶を継承する上でかなり重要な部分を占めている。記憶の継承、伝達という意味において、これからより深く調査していきたい。

また、展示空間、建築構成についての工夫が来館者の感覚に大きく訴えることについては注目されるべき点ではないだろうか。対馬丸記念館や佐喜間美術館等、多くの施設について、開設当初のことを調査したい。更に、様々な館で設立の理念をもう一度詳しく見てみる必要がある。今回の調査報告を踏まえて、今後、Museum の中の人々の活動を調査していきたい。

最後に、4 日間という短い調査期間の中で、これだけ充実した行程を行えたことはひとえに案内してくださった、大城和喜さんのお蔭であり、心から感謝申し上げたい。

---

<sup>1</sup> 南風原文化センターHP より引用。

<http://www.town.haeburu.okinawa.jp/hhp.nsf/0/f2374b0a15de4eea492575520025804c?OpenDocument> (2015 年 2 月 12 日確認済み)

<sup>2</sup> 南風原文化センターHP より引用。

<http://www.town.haeburu.okinawa.jp/hhp.nsf/0/f2374b0a15de4eea492575520025804c?OpenDocument> (2015 年 2 月 12 日確認済み)

<sup>3</sup> 大城和喜さん談。南風原文化センターは 2009 年 11 月にリニューアルオープンした。  
(琉球新報「移転の南風原文化センター 映像資料 3 本製作」2009 年 9 月 27 日)

<http://ryukyushimpo.jp/news/storyid-150377-storytopic-5.html>  
(2015 年 2 月 12 日確認済み)

<sup>4</sup> 沖縄県教育委員会「文化財課要覧(平成 25 年度版) VII 博物館に関すること」を参照。  
[http://www.pref.okinawa.jp/edu/bunkazai/edu/jimukyoku/bunkazai/documents/h25\\_008.pdf](http://www.pref.okinawa.jp/edu/bunkazai/edu/jimukyoku/bunkazai/documents/h25_008.pdf) (2015 年 2 月 12 日確認済み)

<sup>5</sup> 大城和喜さん談。

<sup>6</sup> 消防法の関係により、実際の壕の幅とは異なる。照明も実際は松の油等を用いていたが展示室では電灯で代替している。証言者によれば、壕内は風通しが悪く、よく空気がなくなると油の日が消えたという。(大城和喜さん談)「壕内の明かり」というキャプションが左手壁にあり、「外から入ってくると何も見えない」ほど暗かったことを説明している。

<sup>7</sup> この後の展示も目を通したが、ここでは沖縄戦を中心に扱うため詳述しない。

<sup>8</sup> 南風原文化センター平良次子学芸員談。

<sup>9</sup> 本稿では博物館という名称ではなく、Museum という名称を用いる。戦争や平和関係施設の多くが博物館類似または相当施設であるため、ここではより包括的な意味を含めて Museum を用いることにした。

- 
- <sup>10</sup> ひめゆり平和祈念資料館 HP を参照。 <http://www.himeyuri.or.jp/JP/top.html>  
(2015 年 2 月 12 日確認済み)
- <sup>11</sup> ひめゆり平和祈念資料館編集・発行「ひめゆり平和祈念資料館 資料館だより」2014 年 5 月 31 日発行
- <sup>12</sup> ひめゆり平和祈念資料館 HP を参照。 <http://www.himeyuri.or.jp/JP/top.html>  
(2015 年 2 月 12 日確認済み)
- <sup>13</sup> ひめゆり平和祈念資料館編集『ひめゆり平和祈念資料館 20 周年記念誌 未来へつなぐひめゆりの心』2010 年 3 月 31 日、財団法人沖縄県女師・一高女ひめゆり同窓会立ひめゆり平和祈念資料館発行
- <sup>14</sup> 沖縄県平和祈念資料館 HP より引用。  
<http://www.peace-museum.pref.okinawa.jp/> (2015 年 2 月 12 日確認済み)
- <sup>15</sup> 沖縄県平和祈念資料館 HP 「資料館の案内」を参照。  
<http://www.peace-museum.pref.okinawa.jp/annai/annai/index.html>  
(2015 年 2 月 12 日確認済み)
- <sup>16</sup> 「沖縄県平和祈念資料館 設立理念」(1975 年。2000 年 4 月 1 日一部修正) 沖縄県平和祈念資料館編集『沖縄平和祈念資料館 総合案内』沖縄県平和祈念資料館、2001 年
- <sup>17</sup> 学校行事を指していると思われる。
- <sup>18</sup> 沖縄県平和祈念資料館編集『資料館学習の手引き』沖縄県平和祈念資料館、2001 年
- <sup>19</sup> 県営平和祈念公園「平和の礎」を参照。
- <sup>20</sup> <http://kouen.heiwa-irei-okinawa.jp/shisetsu-ishigi.html> (2015 年 2 月 12 日確認済み)
- <sup>21</sup> 対馬丸記念館 HP を参照。 <http://tsushimamaru.or.jp/> (2015 年 2 月 12 日確認済み)
- <sup>22</sup> 対馬丸記念館パンフレットより引用。
- <sup>23</sup> 佐喜眞美術館 HP より引用。 <http://sakima.jp/> (2015 年 2 月 12 日確認済み)
- <sup>24</sup> 佐喜眞道夫『アートで平和をつくる 沖縄・佐喜眞美術館の軌跡』(岩波ブックレット 904) 2014 年、岩波書店 を参照。
- <sup>25</sup> 同注 23
- <sup>26</sup> 詳しくは展覧会図録、神奈川県立近代美術館 編『戦争/美術 1940-1950 = War/art 1940-1950: モダニズムの連鎖と変容』神奈川県立近代美術館、2013 年を参照。